

<新刊紹介>

エドワード・ウィルソン=リー著 五十嵐加奈子訳

コロンブスの図書館

柏書房 2020.5 415p 20cm

古川 肇

本書のラッパー（カバー）は、目録関係者にとって実に刺激的である。まず本タイトルによって、航海者コロンブスは図書館を創設したのかと驚く。次いで、本タイトルに隣接して原タイトルが印刷されていてそのことだけでも珍しいが、冠詞を除く冒頭に何と Catalogue とあるではないか。

読み始めるとすぐ本書の対象はコロンブスではなく、その第2子、エルナンド・コロン（1488-1539）だと分かる（イタリア語形「コロombo」、スペイン語形「コロン」、英語形「コロンブス」）。以下、訳文に従って「エルナンド」と記す。彼は少年時代に父の4回目の航海に同道し、後に伝記を書いたが（日本では比較的近年になって翻訳された。『コロンブス提督伝』吉井善作訳、朝日新聞社、1992年刊）、自らは父親とは全く別の人生を歩んだ。原著刊行後、早くも2年目に邦訳された本書は、エルナンドの事業を伝えるノンフィクションである。ここに原著についてのデータを記す。著者はケンブリッジ大学に所属する中世・ルネサンス文学の研究者である。

Wilson-Lee, Edward. *The Catalogue of Shipwrecked Books: Young Columbus and the Quest for a Universal Library*. London: William Collins, 2018. 401 p. 24 cm.

さて、エルナンドはまず書籍のコレクターであった。ここで前もって特記しておくべきことがある。それは、彼の生年の僅か一世代ほど前の1450年頃に印刷術が発明された、という彼の歴史的な立ち位置である。当時の代表的な図書館は専ら手写本から構成されていた。例えば、ルネサンス期の数あるイタリアの宮廷のなかで、文化的に特に高い水準にあったとされるウルビーノの宮廷の蔵書について、エルナンドと生没年の一部が重なるフィレンツェの書籍商ヴェスパシアーノ・ダ・ビスティッチ（1421-1498）は、次のように述べているという。「蔵書はすべて最高の品質を誇る手写本ばかりで、印刷本は一冊も含まれていなかったから、もしその中に印刷本が迷い込んだならば、その本は恥じ入ってしまったことであろう。」（『イタリアの鼻—ルネサンスを拓いた傭兵隊長フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロー』ベルント・レック、アンドレアス・テンネスマン著 藤川芳朗訳 中央公論新社 2017.11 「鼻」は変換ミスに非ず）。

ところが、エルナンドは、豪華な装丁が施された神学、哲学、法学などの大冊の代わりに、無名の著者による小冊子、紙きれに印刷されたバラッドなど「ごみ同然」とも思われる代物をむしろ多く所蔵し、宗教や言語の壁を越えて集めたという。あたかも印刷術の発明が書物の世界を一変させ、少数の写本の時代が無限の印刷本の時代に交替したことを、彼が強く自

覚していたかのようである（ただし、一方で手写本やエラスムスの著書も収集している）。なお、エルナンドのほぼ一世代ほど後のコンラート・ゲスナー（1516-1565）は、『万有書誌』の情報源に関して、bio-bibliography の伝統を踏襲するトリテミウス（1462-1516）による書誌など旧来の書誌とともに、印刷業者の販売書目録にも広く求め、現物をも調査して当然ながら中世には存在しなかった印刷本の記述方式の確立に努めた（雪嶋宏一「コンラート・ゲスナー『万有書誌』の書誌記述要素の起源について」『学術研究. 人文科学・社会科学編』61, 2013.3）。

さて、エルナンドは購入資金に不足はなかった模様だが図書の亡失を免れることはできず、買い付けた約1600冊の書籍を積んだ船が、運搬の途中で沈没するという悲運に遭った。原タイトルはこの事件に由来する。このような苦難を経ながらも彼の蔵書は約1万5千冊を超え、当時のヨーロッパの個人蔵書としては群を抜き、セビリヤに図書館が創設された。万有書誌ならぬ万有図書館を目指して創設されたといえよう（原著のサブタイトルを参照）。訳書名はその名称ビブリオテカ・コロンビーナ（Biblioteca colombina）に基づく。後にはスペインの新大陸における不正と先住民に対する残虐行為を告発したことで知られるラス・カサスが、図書館を利用して自著を執筆したこともあったが、洪水に見舞われたりした結果、コロンブスの航海日誌の原本などは消え失せ、現在の蔵書数は僅か約4千冊という。

さて、彼はコレクターであるだけでなく各種の目録作成者でもあった。ここに彼の最大の特徴がある。世にコレクターもビブリオグラファーも多く存在するが、両者を兼備する人は極めて稀であろう。彼は様々な目録を人手を借りながら作成したが、その種類を本文から抜き出し、訳文通りの名称で列挙すると、次のようになる。

#### 著者別目録、科目別目録、概要目録、題材別目録、著者・科目一覧

これらのうち、概要目録はもちろん本の内容を要約したものであるが、長文の場合もあり書評に近づくこともあった。本を手にとることなく、目的の本を効率よく見つけることを可能としたが、どの本を探しているかわかっていることを前提とするこの目録に並立させて、エルナンドは知りたいテーマから検索するための題材別目録を用意する。主題をキーワードで表わし、利用者に多くの蔵書から特定のテーマに関わる情報を集めることを可能とした。キーワードは複数付与されることもあった。

著者・科目一覧については著者自身の言葉を聞こう。「それは一万枚を超える紙片からなり、一枚一枚に『注釈』が書かれていた。そこにはエルナンドのヒエログリフも含まれ、ひと目でその本に関する膨大な情報に触れることができるほか、タイトルに著者名、テーマ、その他の出版情報も豊富に盛り込まれていた。そう聞くと、我々にはすぐにカード目録のようなものだとわかるが、当時の人々にとってはわけのわからない代物だったことだろう。」著者はまた次のようにも述べる。「このカード目録（中略）がもたらしたものは、それはまさしく無限の秩序であり、必要に応じてつねに並べ替えができる目録である。（中略）これは、哲学者ゴットフリート・ライプニッツがハノーバー公の図書館を整理するために同様のシステムを試みる一世紀半も前の話である。」

文中の「ヒエログリフ」とは、本書内の他の箇所では「ビブリオグリフ」とよばれ、エルナンドが発案した個々の本の特徴を示す記号である。大きさ、大体のページ数、索引の有無、詩か散文かの別、手稿本か印刷本かの別、完本か否かの別、索引の有無、原語か翻訳かの別、著者の名前の有無等を伝えるマークである。それらは、著者によればトマス・モアの『ユートピア』に現われる架空の文字に似ている。

著者はこうしてエルナンドの作成した各種目録について述べた後、次のように締めくくる。「[...]全世界の知識を集めた宝庫——キーワードによる検索が可能で、概要を通じてさまざまな情報に触れ、異なる基準に沿った並べ替え、そして世界中に広がる拠点からのアクセスが可能なのはまさしく、ほぼ500年後に登場するワールド・ワイド・ウェブ、サーチエンジン、データベースといった、インターネットの世界を予感させるものだった。」

最後にエルナンドの図書館の大きな特色を紹介したい。それは蔵書を立てて排架されていたことである。当たり前と言うなかれ。彼以前の図書館では書物は常に横たえて置かれていた。我々が本を立てて並べるのは彼のアイデアに由るのである。

このように本書はエルナンドの事業について生涯を追いつつ詳細に描いているが、評者には読後に抽象面と具体面とで不満が残った。第一に彼が大きな負担を担いつつ活動を続けた根本の動機が何であるか、それが追求され明記されていないことである。第二に目録の大半は奇跡的に難を逃れたと述べているにもかかわらず、その図版が掲載されず隔靴搔痒の感を否めないことである。とはいえ、拙文では触れなかったが著者性に関する示唆も含まれているなど、本書は十分味読に値する評伝である。

(追記) 筆者は拙文の執筆中に、本書中で著者が「この目録は行方不明で、おそらく二度と出てはこないだろう。」と記した概要目録が、実は2013年にユネスコの「世界の記憶」に含まれる「アウルトニ・マグヌッソン写本コレクション」において、発見されていたことを知った(ちなみにアウルトニ・マグヌッソン(1663-1730)はアイスランド人なので、「マグヌッソン」は姓ではなく父称または母称である)。著者はあいにく本書の本文確定までに、この事実を知ることはなかったわけである。我々は次のURLをもつサイトでこの目録の実に鮮明な画像を見ることができる(最新アクセス日:2021/4/5)。

<https://mag.rjeem.com/libro-de-los-eptomes-a-500-year-library-catalog-surfaces-anew-npr/>

最後に、このサイトに掲載されている本書の著者ウィルソン=リーへのインタビューから、再発見写本を知った彼の、それに対する評言を2つ引用して新刊紹介を終える。

"[The newly discovered manuscript is] a totally wonderful thing."

"It's 2,000 pages long in beautifully beautiful handwriting."

(ふるかわ はじめ)

2021年4月23日受理